

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

1日

友引 井

旧6月27日

木曜

妙法蓮華経法師品第十

遣化人

「変化（へんげ）の人を遣わして、法師を護る」

お釈迦さまが入滅した後、教えを弘める法師を護るために、自分の代わりに人の姿をした「変化の人」を遣わすと説かれています。

未熟な者が法を説く場に、その話を一心に聴いてくれる人がいたとしたら、その人は仏さまが遣わした「変化の人」なのです。

「変化の人」に励まされ、困難を乗り越えたとき、仏さまの守護も感じられ、信仰も深まってくるはずです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

2日

先負 鬼

旧6月28日

金曜

妙法蓮華経法師品第十

けつりよう しょうもん ほう ぜ しょ きよう し おう

決了声聞法 是処経之王

「声聞の教えを決了し、經典の王とする」

声聞は世の中のわずらわしきから離れ、煩惱を除く修行をしていました。

それがさらに進んで、人のために尽くそうと励むようになれば、菩薩の行になるのです。

声聞の法をどこまでも推し進めていくと、一切衆生を救うために尽くすようになると教えたのが、あらゆる經典の王である法華経です。

その意味を十分に弁え、教えを聞き、自分のものとなるまで考え、実践して行きましょう。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

3日

仏滅 柳

旧6月29日

土曜

妙法蓮華経法師品第十

うにん あつく め か どう じょうがしやく

有人悪口罵加刀杖瓦石

「悪口し罵られ、刀杖瓦石を投げつけられども」

法華経を弘めるときに、悪口を言い罵り、刀や杖で打ったり、瓦や石を投げつけたりする者があつたら、その者を憎いと思うのではなく、この迫害に堪え忍ぶことが、仏さまの感恩に奉ずる道であると信じるのだと説かれました。

目の前の敵対者だけを相手にしていたのでは、争いになってしまいます。

大きな仏さまのために働いているのだと思うことが前に進む力になるのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

4日

先勝 張

旧7月1日

日曜

妙法蓮華経法師品第十

にやくしんごんほつし

そくとくぼ

きつどう

若親近法師

速得菩薩道

ずいじゆんぜ しがく

とっけんごうじゃぶつ

随順是師学

得見恒沙仏

「理想の法師」

「一心に法を弘める法師に近づいたなら、自ずから大きな感化を受け、菩薩の道を成就することができるとあろう。」

そして、その法師にしたがって教えを学べば、ガンジス川の砂の数ほど限らない数の仏さまに見まえるような心持になるだろう」

そう説かれる法師品の最後の文は、教えを弘める者の大きな理想であり、僧侶の葬儀法要の回向文として読み上げられます。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

5日

友引 翼

旧7月2日

月曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

に じ ぶつ ぜん

爾時仏前

う しつ ぼう とう

有七宝塔

「その時に七宝の塔が地より湧きあがった」

お釈迦さまが説法をしているその前に、たくさんさんの宝で飾られた巨大な塔が、地面から湧きだし空中に留まりました。

いきなり空中に現れるのではなく、地から湧きだしたのは、地道に修行を積み上げていく仏道修行の在り方を示しています。

塔は教えを弘める拠点です。

仏さまの教えによって安穏な場所となる目印の塔が、地から空中に湧き出したのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

6日

先負 軫

旧7月3日

火曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

びよう どう だい え

平等大慧

「絶対不変の仏さまの智慧」

「平等大慧」とは、絶対不変の仏さまの智慧・一切衆生の命と可能性を平等に見る智慧です。この智慧によって一切衆生を見ると賢愚善悪様々であっても、いつかは仏に成る存在であると見極めることができます。なかには仏のさまの教えを聞こうとしない者がいても、教えを弘める者を迫害する者がいても、決して見捨てることなく、教えを説き続ける大きな智慧なのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

7

日

立秋

仏滅 角

旧7月4日

水曜

妙法蓮華経授見宝塔品第十一

きょう ぼ さつ ぼう

ぶつ しょ ご ねん

教菩薩法 仏所護念

「菩薩の法・仏所護念の妙法華経を説く」

仏に成るには、菩薩として世のため人のために
尽くし、慈悲の心を育てなければなりません。
そのため、仏さまは平等大慧をもって菩薩の法
をお説きになるのです。
そして、それぞれの機根に合わせて、浅い教え
から深い教えへと時間をかけて、平等大慧をも
って導かれます。
その仏さまが念じ護られている教えが真実の教
え「法華経」なのです。

妙法蓮華經見宝塔品第十一

爾時仏前。有七宝塔。高五百由旬。縦広二百五十由旬。從地涌出。住在空中。種種宝物。而莊校之。五千欄楯。龕室千万。無數幢幡。以為嚴飾。垂宝瓔珞。宝鈴万億。而懸其上。四面皆出多摩羅跋栴檀之香。充氣世界。其諸幡蓋。以金。銀。瑠璃。凶技。碼碯。真珠。強瑰。七宝合成。高至四天王宮。三十三天。雨天曼陀羅華。供養宝塔。余諸天龍夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦樓羅。緊那羅。摩疫羅伽。人非人等。千万億衆。以一切華香瓔珞。幡蓋伎樂。供養宝塔。恭敬尊重讚歎爾時宝塔中。出大音声。歎言善哉善哉。釈迦牟尼世尊。能以平等大慧。教菩薩法。仏所護念。妙法華經。為大衆說。如是如是。釈迦牟尼世尊。如所說者。皆是真實。爾時四衆。見大宝塔。住在空中。又聞塔中。所出音声。皆得法喜。怪未曾有。從座而起。恭敬合掌。却住一面。爾時有菩薩摩訶薩。名大樂說。知一切世間。天

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

8日

大安 亢

旧7月5日

木曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

かい ぜ しん じつ

皆是真實

「多宝如来による法華経最勝の証明」

お釈迦さまが今説かれた法華経が眞実である
と、多宝如来が証明されました。

過去仏である多宝如来が眞実の証明をしたと
いうことは、法華経がどんな時代にも通用す
る教えであることを示しています。

方便品でお釈迦さま・宝塔品で多宝如来・神
力品で分身諸仏、この三仏によって法華経
が最も勝れた教えであることが証明された
と、日蓮聖人は引用されています。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

9日

赤口 氏

旧7月6日

金曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

如来全身

「全てを具えた仏の御身」

如来の全身とは、仏さまの御身がそこにあるというだけではなく、仏さまが具えている力と徳が、宝塔の中にあることを示しています。それは、永遠の實在である宇宙の真理であり、衆生を救う仏の智慧であり、衆生を救うために現れた仏さまの姿でもあります。如来の全身とは、これらすべてを具えた仏さまの姿を示し、法華経が真実であると示した多宝如来が宝塔の内にいることが明かされました。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

10日

先勝 房

旧7月7日

土曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

こんた ほう によらいとう

今多宝如来塔

もんせつ ほ け きようこ

聞説法華経故

従地涌出

じゅうじゅじゅつ

「真実を証明するためには多宝如来の塔が湧出」

今、多宝如来の塔が、法華経の説法を聞くために地から湧出し、その真実を証明しました。

真実の証明する多宝如来にも法華経を説く実力がなければ、証人になることはできません。

誰もが仏に成れる説くお釈迦さまと、それが真実であると保証する第三者である多宝如来がいてくださるからこそ、私たちも自分の道が間違いないと信じて進むことができますのです。

安心して仏の道を歩んでまいりましょう。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

11日

友引 心

旧7月8日

日曜日

妙法蓮華経見宝塔品第十一

ひ ぶつふんじん しょぶつ

彼仏分身諸仏

ざい お じつぽうせ かいせつぽう

在於十方世界説法

じんげんしゆういつしよ
尽還集一処

「分身諸仏を一処に集める」

「彼の仏」すなわち、法華経を説かれているお釈迦さまがその身を分けて、それぞれの仏国土で説法している諸仏を一か所に集めて、法華経の真実を証明しようと、多宝如来は誓願を立てられました。

そこには十方の仏国土で法華経を説く数限りない分身諸仏たちとともに法華経の真実を確認し合い、その教えが間違いなく伝わるようにと徹底する意味もあるのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

12日

先負 尾

旧7月9日

月曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

さん べん ど でん
三変土田

「説法の場合を三変整える」

お釈迦さまは、神通力をもって三回、穢土を浄土に変えました。

十方分身諸仏が坐る場所を整えるために、最初は「娑婆世界」、次に「八方の二百万億那由他の国」、三度目に再度「八方の二百万億那由他の国」を清浄にして、地獄・餓鬼・畜生・修羅及び増上慢の人天を他の国土に移しました。凡夫の「見思の惑」、二乗の「塵沙の惑」、菩薩の「無明の惑」を断つことにも通じます。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

13日

仏滅 箕

旧7月10日

火曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

かく さい ほう け まん ぎく

各齋宝華満掬

「各々宝華を持ち、手のひらに掬(すく)う」

インドには樹に咲く花は多くないので、地に咲く草花や蓮の花を摘んで、仏さまに供養する際にまき散らしていました。

「掬」は手のひらに掬うこと。

両手で花びらを掬って、仏さまの前にまき散らすことによって、帰依している気持ちを表し、感謝の思いを伝え、自らの心も清浄になっていくのです。

法要にて散華するのも同じ意味です。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

14日

大安 斗

旧7月11日

水曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

じゅう

こ

くう

ちゅう

住虚空中

「お釈迦さまが虚空に昇る」

十方諸仏がそろい、宝塔の扉を開けるようにと皆の思いが一致したところで、お釈迦さまは宝塔が浮かぶ虚空へと昇りました。

空はすべてを平等に覆うので、虚空に昇るということは一切衆生を覆い尽くし、平等に救い、導くことの表れです。

聴衆は立ち上がり虚空を見上げ、お釈迦さまが宝塔の扉を開く様子を見つめていました。大事な教えが広まる瞬間です。

妙法蓮華經見宝塔品第十一

如所說者。皆是真實。爾時四衆。見大宝塔。住在空中。又聞塔中。所出音声。

〈略〉

爾時仏告。大樂說菩薩。此宝塔中。有如来全身。乃往過去。東方無量千万億。

〈略〉

大樂說。今多宝如来塔。聞說法華經故。從地涌出。讚言善哉善哉。

〈略〉

示四衆者。彼仏分身諸仏。在於十方世界說法。尽還集一处。然後我身。

〈略〉

問訊釈迦牟尼仏。各齋宝華滿掬。而告之言。善男子。汝往詣耆闍崛山。

〈略〉

爾時釈迦牟尼仏。見所分身諸仏。悉已來集。各各坐於師子之座。皆聞諸仏。

与欲同開宝塔。即從座起。住虚空中。一切四衆起立合掌。一心觀仏。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

15日

赤口 女

旧7月12日

木曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

い う し かい

以右指開

「右の指をもって宝塔の扉を開けた」

左は「理」絶対の真理、右は「智」理を活かす働きを表すといわれます。

心が荒んだ末法に教えを弘めるようにと命じるために扉を開くのは、絶対の真理の教えを活かす力を示す右手でなければならぬのです。

扉を変えたときに大きな音がしたのは、教えが永く遠くまで伝わるという意味です。

尊い教えが永久に後の世に伝わっていくであろうという現れです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

16日

先勝 虚

旧7月13日

金曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

に ぶつ びよう ぎ

二仏並坐

「釈尊と多宝如来が並び坐る」

多宝如来は宝塔の中で、座の半分をお釈迦さまに譲られました。

これには視覚的な一体化以外に、

①時間的な一体化：過去仏と現在仏が並び時がつながり未来の説法者を募る展開へ

②目的の一体化：多宝仏の「誓願」と釈尊の「法華経説法（一大事因縁）」が一体となる

③教義的な一体化：説法と内容の証明の意味あると考えられます。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

17

日

先負 室

旧7月14日

土曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

かい ぎい こ かう

皆在虚空

「皆、虚空へ」

三变土田の前は十界の住人が揃っていました。
三变土田の後には法華経の聴聞を許された衆生
と、分身諸仏と侍者の菩薩たちで地上は見渡す
限り埋められていました。
仏の視点で十方十界を見渡し、仏の本懐を説く
ため、先に二仏が並び、より清らかな虚空とい
う仏の空間に昇る必要があったのです。
虚空と衆生が住む大地とが一体であることを示
すために宝塔が涌出したのだと考えられます。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

18日

先負 室

旧7月15日

日曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

さん

か

ちよく

せん

三箇の勅宣

「三度にわたり法華経の弘教を勧める」

過去仏の多宝如来と現在仏のお釈迦さまと分身の諸仏が揃い、時間と空間を超えた虚空会にて、滅後の弘経者を募る条件が整いました。お釈迦さまは、迹化と他方来の諸菩薩を始めとする大衆に法華経弘通を託するために、三度にわたって勧めるお言葉を発します。

この三度の大声は遙かに下方の菩薩に届き、地涌菩薩出現、寿量品の久遠実成、神力品別付属・嘱累品総付属につながっていくのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

19日

仏滅 壁

旧7月16日

月曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

りよう ぼう く じゆう
令法久住

「法をして久しく住せしめん」

この娑婆世界に尊い教えがいつまでも滅びることなく伝わっていくようにと一切衆生を愍れむ大慈悲心から、多宝如来と分身諸仏がこの説法の場を集まりました。

仏さまの一番の歡びは正しい教えが世に広まることです。

諸仏は、それぞれの仏国土で人々から敬われ供養を受けるより、今お釈迦さまが法華経を説かれています。説法の場を集うことを選んだのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

20日

大安 奎

旧7月17日

火曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

ひによ だいふう

すいしょうじゆし

譬如大風 吹小樹枝

「譬えば大風の小樹の枝を吹くが如し」

尊い教えが世に弘まり人々が喜ぶ様子を、大風が小さな木の枝を吹くようだと譬えています。仏さまが種々の方便を用いた結果として、教えが弘まり、後世に伝わっていききました。お釈迦さまも日蓮聖人も、法を弘める過程では多くの迫害に遭われました。大風が大きな枝も揺らすように、方便の教えに固執し、正しい教えを受け入れられない為政者の心が刺激され、迫害につながったのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

21日

赤口 婁

旧7月18日

水曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

じ せつ せい こん

自説誓言

「自ら誓言を説け」

お釈迦さまは、滅後に法華経を護持し、読誦する者はいないかと聴衆に呼びかけました。

そして今、諸仏の前でその約束をするならば、決して背くわけにはいかず、迫害にも負けない相当の覚悟が求められます。

「自ら誓言を説け」とは、諸仏の前でその覚悟を示し、誓いを述べよということです。

「自ら」と、自分に大きな決心を言い聞かせることをお釈迦さまは求められたのです。

妙法蓮華經見宝塔品第十一

一切四衆起立合掌。一心觀仏。於是釈迦牟尼仏。以右指開。七宝塔戸。

〔略〕

爾時多宝仏。於宝塔中。分半座与釈迦牟尼仏。而作是言。釈迦牟尼仏。可就此座。即時釈迦牟尼仏。入其塔中。坐其半座。結跏趺坐。爾時大衆。見二如来。

在七宝塔中。師子座上。結跏趺坐。各作是念。仏坐高遠。唯願如来。以神通力。

令我等輩。俱処虚空。即時釈迦牟尼仏。以神通力。接諸大衆。皆在虚空。以大音

声。普告四衆。誰能於此。娑婆国土。広説妙法華經。今正是時。如来不久。当入

涅槃。仏欲以此。妙法華經。付囑有在。爾時世尊。欲重宣此義。而説偈言

聖主世尊 雖久滅度 〔略〕 天人龍神 諸供養事 令法久住 故来至此

為坐諸仏 以神通力 〔略〕 衆生蒙薰 喜不自勝 譬如大風 吹小樹枝

以是方便 令法久住 告諸大衆 我滅度後 誰能護持 誦誦斯經 今於仏前

自説誓言 其多宝仏 雖久滅度 以大誓願 而師子吼 多宝如来 及与我身

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

22日

処暑

先勝 胃

旧7月19日

木曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

ごうのうご

しきようぼうしや

其有能護 此経法者

「其れ能くこの経法を護る者」

永久に法華経が弘まり、大勢の人がそれを信じ安穩な世界が続くようにするために、この経法を護る者がいなければなりません。

自分が信じるだけでなく、実践し、世に弘めることが大事なのです。

お釈迦さま・多宝如来・分身の諸仏は、その心が具わっている「仏の中の仏」なのです。

日蓮聖人は、仏界が仏界を具える文証として、この文を引用されています。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

23日

友引 昴

旧7月20日

金曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

此しい為い難なん事じ

宜ぎ発ほつ大だい願がん

「此れはこれ難事なり

宜しく大願を発すべし」

法華経を世のなかに弘め、苦しんでいる人を救い、迷いの中にある人の目を覚ますことが、真に仏恩に報いる道です。

しかし、それは非常に難しく、必ず成し遂げると大願を発して臨まねばなりません。

くじけそうになったら、仏さまがそばで見守っていることを思い出しましょう。

日蓮聖人は、法華経受持の難しさを伝えるために多数の御遺文でこの文を引用されています。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

24日

先負 畢

旧7月21日

土曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

ろく なん く い

六難九易

「六つの難事と九つの易事」

「六難九易」とは、仏の滅後に弘教する際に、六難と九易とを対比させて説示したものの。

九易も必ずしも容易なことではなく、大難事とされるものですが、滅後の法華経の受持弘教に比べれば易い事であるとされたのです。

お釈迦さまは「三箇の勅宣」の第三度目に、六難に負けず受持弘教の誓言を説けと勧めました。

勸持品の二十行の偈と共に、日蓮聖人の死身弘法・法華色読の弘教活動を支えた経文です。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

25日

仏滅 齋

旧7月22日

日曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

説経難

せつ きよう なん

「乱れた世の中で教えを説く難しさ」

「六難」の一つ目。

經典の講釈だけなら誰にでもできそうですが、世の中が廃れ、人心が乱れてくると、正しい教えを伝えても、笑っつたり、罵っつたり、あざける者が増えてきます。

いくら説いて聞こうともせず、迫害を与える者さえ出てきます。

この迫害に堪えて、根気よく説き続けることの難しさを示しているのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

26日

大安 参

旧7月23日

月曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

しよ じ なん
書持難

「信じ忘れない難しさ」

「六難」の二つ目。

「書持」とは書き写すだけでなく、信じ忘れないことを意味します。

法華経を読み「有難い」と思うことがあっても、日々の生活に追われていると、その「有難い」という思いを持ち続けるのが難しくなります。

「有難い」と燃え上ってもすぐに消えてしまう火のような信仰よりも、絶え間なく湧き出す水のような信仰が大事なのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

27

日

赤口 井

旧7月24日

火曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

ざん

どく

なん

暫読難

「暫くの間でも法華経を読むのは難しい」

「六難」の三つ目。

「暫読」とは、経典を少しだけでも読むこと。

声に出して読むだけでなく、心に深く信じる

「心読」、自ら実践する「色読」まで行かなけれ

ば、真に読んだとはいえませんが。

迫害に遭い追い詰められれば、ほんの少しの

「色読」も難しくなります。

末法の多事多難な世の中で、暫くの間でも法華

経を読むのは難しいのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

28日

先勝 鬼

旧7月25日

水曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

説法難

せつ ぽう なん

「経典を日常に当てはめその精神を説く困難」

「六難」の四つ目。

「説教」は経典について説くことです。

「説法」は経典を日常の生活に当てはめて、
経典の精神を説くことです。

経典の内容を理解しているだけではなく、世の
中のことがわかっていなければ「説法」はできな
いので難しいのです。

人々の苦しみに寄り添い、社会の問題を理解し
ていなければ「説法」はできないのです。

妙法蓮華經見宝塔品第十一

当發大願 令得久住 其有能護 此經法者 則為供養 我及多宝 此多宝仏

處於宝塔 常遊十方 為是經故 亦復供養 諸來化仏 莊嚴光飾 諸世界者

若說此經 則為見我 多宝如來 及諸化仏 諸善男子 各諦思惟 此為難事

宜發大願 諸余經典 數如恒沙 雖說此等 未足為難 若接須弥 擲置佗方

無数仏土 亦未為難 若以足指 動大千界 遠擲佗国 亦未為難 若立有頂

為衆演說 無量余經 亦未為難 若仏滅度 於惡世中 能說此經 是則為難

假使有人 手把虚空 而以遊行 亦未為難 於我滅後 若自書持 若使人書

是則為難 若以大地 置足甲上 昇於梵天 亦未為難 仏滅度後 於惡世中

暫讀此經 是則為難 假使劫燒 擔負乾草 入中不燒 亦未為難 我滅度後

若持此經 為一人說 是則為難 若持八万 四千法蔵 十二部經 為人演說

令諸聽者 得六神通 雖能如是 亦未為難 於我滅後 聽受此經 問其義趣

是則為難 若人說法 令千万億 無量無数 恒沙衆生 得阿羅漢 具六神通

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

29日

友引 柳

旧7月26日

木曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

ちよう じゆ なん

聴受難

「聴いて正しく理解し信じることは難しい」

「六難」の五つ目。

「聴受」聴いて受けるとは、信じることです。

教えを聴いて、要所をとらえ、「信」にまで至るのは難しいことです。

自分が聴いて理解したとしても、どこかで見当違いしているかもしれません。

難解難入の教えを正しく理解し、信じるのはとても難しいことです。

地道な努力を積むことが大事なのです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

30日

先負 星

旧7月27日

金曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

ぶ

じ

きよう

なん

奉持経難

「教えを持ち続ける難しさ」

「六難」の六つ目。

「奉持」とは教えを確かに持ち続けて、後に伝えることです。

自分一人が信じるだけでなく、普く世に弘め、後世にまで滅びることなく伝わるように、護ることが一番重要で難しいことです。

人心が乱れた世の中に、正しい教えを伝えようとすれば、大きな迫害に遭うのは必定です。その迫害に堪え得る信仰を貫く難しさです。

法華経 日めくり

令和6年 甲辰

2024年

8月

31日

仏滅 張

旧7月28日

土曜

妙法蓮華経見宝塔品第十一

九く易い

「九易も必ずしも容易なことではない」

「九易」とは、①法華経以外の無数の諸経を説く
②須弥山を他方の仏土に投げ置く ③足の指で
大千世界を動かし他国に投げる ④有頂天に立
って無量の余経を説く ⑤手に虚空の世界をつ
かんで遊行する ⑥大地を足の爪の上ののせて
梵天に昇る ⑦乾いた草を背負って大火に入っ
ても焼けない ⑧八万四千の法門を持ち人に演
説して聴衆に神通力を与える ⑨無量の衆生に
阿羅漢果を得させ神通力を具えさせること。

妙法蓮華經見宝塔品第十一

入中不燒	亦未為難	我滅度後	若持此經	為一人說	是則為難
若持八万	四千法藏	十二部經	為人演說	令諸聽者	得六神通
雖能如是	亦未為難	於我滅後	聽受此經	問其義趣	是則為難
若人說法	令千万億	無量無數	恒沙衆生	得阿羅漢	具六神通
雖有是益	亦未為難	於我滅後	若能奉持	如斯經典	是則為難
我為仙道	於無量土	從始至今	廣說諸經	而於其中	此經第一
若有能持	則持仙身	諸善男子	於我滅後	誰能受持	誦誦此經
今於仙前	自說誓言	此經難持	若暫持者	我即歡喜	諸仙亦然
如是之人	諸仙所歎	是則勇猛	是則精進	是名持戒	行頭陀者
即為疾得	無上仙道	能於來世	誦持此經	是真仙子	住淳善地
仙滅度後	能解其義	是諸天人	世間之眼	於恐懼世	能須臾說
一切天人	皆忘供養				